

京都産業大学 ことばの科学研究センター 第4回研究会

日時：2026年10月14日（水）14:00～17:00

会場：4号館2階総合学術研究所会議室

無位の真人とは何だ？

——朝鮮諺解文獻に見える「乾屎橛」——

杉山 豊（ことばの科学研究センター研究員・外国語学部教授）

「無位の真人、是れ什麼の乾屎橛ぞ！」禪籍の日本における伝統的解釋に言ひ及ぶとき、必ずと言ってよいほど取り上げられる一節である。この著名な臨濟義玄の語について、朝鮮では一種独自の解釋が、近現代に至るまで行なはれてゐる。15世紀の朝鮮語文獻、『永嘉大師證道歌南明泉禪師繼頌』諺解は、その解釋を文證し得る最初期の資料に屬すると思はれる。本發表では、同書に見える「無位真人」の問答の譯出を紹介するとともに、その禪籍解釋史資料としての意義を考へてみることにしたい。

えんだいいんのみや

円台院宮筆『源氏物語聞書』について

盛田 帝子（ことばの科学研究センター研究員・外国語学部教授）

江戸時代後期の宮廷における『源氏物語』の受容実態、とりわけ堂上家や宮廷歌人による講釈・註釈・再創造の営為については、研究史上の空白となっている。堂上歌人による『源氏物語』受容の実態解明に向けた第一歩として、有栖川宮職仁親王の第四王女であり、後に近衛家二十四代当主経熙の正妻となった董子（円台院宮）の手になる『源氏物語聞書』について紹介する。

日本語格助詞の獲得

鈴木 孝明（ことばの科学研究センター研究員・外国語学部教授）

母語としての日本語における格助詞の獲得について、主格「が」、対格「を」、与格「に」、属格「の」の4つを中心に概観する。自然発話および実験研究にもとづき、産出と理解の両面からその発達過程を検討するとともに、インプットとの関係も取り上げる。また、獲得過程でみられる誤用とその要因を形態・意味・統語の観点から整理し、関連する形態統語現象も含めて、格助詞の背後にある統語知識の発達を考察する。さらに、異なる研究方法から得られた知見を統合し、これまでに明らかになっている点と今後検討すべき課題を示す。